心に響け

色とりどり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心に響け

【Ｎコード】
Ｎ６４９４Ｐ

【作者名】
色とりどり

【あらすじ】
心に響いての
石井目線で書き上げました！

私の名前は美月　千恵【Ｍｉｄｕｋｉ　Ｔｉｅ】私の家はそんなに裕福じゃないでも高校入学の時に買ってもらったバイオリンが好き。毎日弾いていた弾いている間はなんだか私一人の世界ってかんじでとても幸せだった。この空間には何も入れたくないそうずっと思っていた。

私は毎日朝と昼に学校でバイオリンを弾く事が日課になっていたの特に何の音もない静まりかえった学校に響くバイオリンを聞くのがとっても好きだった。

ある日に私がいつものようにお昼休みにバイオリンを弾いてたらいつの間にか後ろに男の子がいた初めは恥ずかしかったまさかこの時間に誰か来るなんて思わなかったし防音だったから外に漏れるはずはないそう思っていたとても驚いた。でもゆっくり相手の顔を見るとずっと気になっていた男の子だった名前は石井　音葉【Ｉｓｉｉ　Ｏｔｏｈａ】でも私はとても恥ずかしがり屋だから顔を見ただけで顔が真っ赤になってしまうの。だからそれに気付かれるのが嫌で逃げるようにして音楽室を出てきてしまった。その後から彼は私のクラスに時々来ていたのを知っていた友達としゃべっている雰囲気だったけど時々こちらを見る

顔が赤くなってしまうのでついフイっと顔をそむけてしまうほんとはおしゃべりとかもしたいのに。毎日弾いていればまた来てくれるかな？そう思いながら弾いている

でも彼は一向にきてくれないの。でもある日右下の音楽室からとてもきれいなピアノの音が聞こえたの。私は気になって見に行くと彼はとても楽しそうにピアノを弾いていたの。

ちょっと隠れて聞いていた。それから毎日聞いていた。どんどんどんどん上手くなっているそんな彼を見るのがとても好きだった。でも本当に楽しそうだからちょっとあのピアノに嫉妬しちゃった、で

も最近は彼が私のバイオリンに合わせてくれていたのに気付いた。
朝はやくに弾く事が日課だったから弾いてたのそしたら隠れながら
こっちを見ている彼に気付いた。その後先生に言われて資料室の片
づけを頼まれたの。そして資料室に行くと
彼が片づけをしてた私のほかにも頼んだのだろうと思った。彼に気
付かれないように奥の方を片づけていた。彼は一切気付かなかった。
彼が出て行ったあと私も資料室を出た
彼は教室に戻ったけど私はそのまま学校を出た彼が少し後ろにいる
のに気付いた
いつもは友達と一緒だったから遠回りだったけど今日は一人だった
から人通りの少ない
みちを通ることにしたの。彼も同じ道だったのに初めて気付いた。
少し微笑んでしまう。そこに警官がやってきた。
「君は〇〇高校の生徒だよね？」なぜか小声でそう聞いてきた「は
い」と私も小声でそう答えた。道を聞きたいなんて警官にありえる
？って思ったけど仕方なく答えようとしたら
後ろから彼が「おい警官なんだよな」とかなり疑いをかけて聞いて
いたそれに対して返答した警官は明らかに何か隠しているようだっ
た。ちょっと彼が出てきたのに驚いたけど
道を教えようとしたそしたら彼が私の腕をつかんだ私はかなり戸惑
ってしまったけど
彼は「いいから早く来て！」そう叫んだ。私はそこ声の通りその場
を逃げる。だってその警官の右手にはナイフを持っていたから私は
あわてて逃げるでも彼が来てないことに
気付く私は誰のか分からない倉庫の影に隠れた幸いあの警官の格好
をした男には気付かれていなかったあわててそして小声で本当の警
察に電話をかける「あの〇〇高校の美月です。
いま〇〇通りの路地裏なんですが警官の格好をした男がナイフを持
って暴れています友達が私を助けるために犯人と対峙しているので
サイレンを鳴らさず来てください」あわてている割には冷静だった

気がする。2人は何か話している男がナイフを投げるのを見た
そのナイフが彼の腕にかすめたのもみてつい叫びそうになる
彼が男に突っ込んだ時とてもあわてたもしかしたさされたかもと思ったが
すぐに彼は立ちあがってその右手には男が投げたナイフを持っていた彼は男に向かって投げつける当てにはいってなかったのは見ればわかった。
男がとても怯えた眼をしていた。
遠くだったから最後の方しか聞こえなかったけど「千恵を怖がらせた罪しっかり償ってもらう」そう言ったあと本当の警官が来た私はさっきのセリフがとても心に響いた。
彼と警官が話している時警官がこっちに目線を送ったおもわず視線をそらす
彼が近くにやってきて「大丈夫だった？」そう聞くので「うん大丈夫だった」そう答えた
そのすぐ後に指さして「そこの倉庫の横に隠れててその音葉君の声が聞こえて」そう言うと彼は少しあわてた口調で「えっ・・・とじゃあ、あれも」ときかれうなずく
彼は顔を赤く染めていたちょっとかわいいと思ったでも私も赤くなってるんじゃないかとも思った。私は思い切って「ありがとう助けてくれて、それと・・・付き合って下さい」
そういったそうしたら少し間をおいて「俺と付き合ってくだしゃい」そう言った。あ・・・噛んだ、そう思った私は「ありがとう」と顔が赤いのを自分でも気付きながら言った
その後二人とも警察にいろいろ聞かれた。そして一緒に帰った帰り道に私は
「明日早めに学校に来て」そう言って私は家に入る。彼の顔は恥ずかしくて見れなかった
あんまり眠れなかった。
翌日私はかなり早く学校に来た職員玄関から入って3階に上がって

左下の音楽室に入る
扉は閉めないそして弾いていると扉の前に彼がいた少し驚いて
弾くのを止める。微笑んで「おはよう」と言うと顔を赤くして彼が
「おはようございます」
なぜ敬語？っとおもったけどすぐ「一緒に弾かない？」そう聞くと
彼はなんで知ってるの？
っと言う顔をして「えっ・・・」と答えるその後間をおかずに「私
音葉君のピアノ好きなんだよね」そう言った。彼は深呼吸する私に
目で合図して私がうなずく
とてもきれいなメロディーが校内に響くこの音が彼に、
彼の心に響け

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6494p/

心に響け

2011年1月13日08時27分発行